

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.26

平成15年11月8日

能と謡曲の面白さを深めるために



会長 新堀 豊彦

能や謡曲を趣味とする我々にとって、あまりにも知っておかなければならないことが多い。稽古を重ね、修行を積み、能の持つ深さを知覚すればする程、面白さも加わると同時に、その難しさや厳しさも一層強く感じられるようになることも間違いでない。

能のもつ芸術性には重層的な複雑さがあり、文学、歴史、音楽、舞踊、美術工芸などの知識があればある程、理解がたかまるといえるだろう。

最近、私は二つの能に関する書物に接した。

ひとつは、アメリカのコロンビア大学の碩学、日本文化研究

の第一人者であるDonald・キーン教授の書いた「能・文学・歌舞伎」である。二〇〇一年に発表された比較的新しい著作で、同教授の集大成的なものといえる。

ここに描かれた能に関する観察と分析の鋭さは、欧米人であってもここまで理解し得ることの驚きに満ちている。かつてフエノロサから始まり、クロード・ルイ・バロオ、ジャン・コクトオなど著名な欧米の文化人芸術家によって讃詞を送られて来た能であるが、ドナルド・キーンによる研究の素晴らしさは、我々が舌を巻かざるを得ない細微なアプローチと知識の集約が見られるのである。一九五三年に京都に住みつき、金剛能楽堂で初めて観能されて以来、これ程情熱的に能の世界へのめりこ

んだ外国人はいないのではあるまいか。

この一冊によって、我々は自分たちののだと思っていた能を、さらに新たな角度、切口から、きわめて丁寧に教え直される。そして能のもつ不思議な魅力と底知れない奥深さに陶醉することが可能である。是非御一読されることをお勧めしたい。(講談社学術文庫、吉田健一・松宮史朗訳)

次にもう一冊。これは学者でも評論家でも、プロの能楽師でもない、一愛好者の書いた力作「謡曲紀行」(白竜社、二〇〇三年五月発行)を紹介したい。小倉正久という千葉県我孫子市で病院の院長をされている医学博士の著作。この方是一九三一年生まれで私と同年、かつ私と同じ宝生流の門下生の一アマチュアであるが、十五年程前から御夫妻で謡曲に関係のある場所を探し求め、日本全国はおろか、中国大陸まで足をのびし、「邯鄲」「咸陽宮」「三笑」「石橋」等々の舞台となった、ゆかりの地を渉猟し尽し、現行一八〇番(宝生)すべてに及ぶ調査の結果が、一、二巻あわせて実に千頁に達する大著としてまとめられたものである。

謡曲巡りの書は過去にも何冊もあり(「謡曲めぐり」―青木

実―鶴世。「謡曲ゆかりの古蹟大成」(木本誠二―喜多)、決して珍しくないが、今回の小倉氏の大冊は実にきめこまやか。謡曲愛好家にとって、全く実用的なばかりか、加えられている取材抄記とも言うべき著者の感想や解説が実にいい文章で読み易く面白い。写真も豊富で、杉本苑子(作家)の序文もあり、少しお値段は高いが(上下二冊で一八〇〇〇円)是非手もとに置いておきたい快著である。流派にかかわらず愛好者にお薦め出来る(連絡先・白竜社 電話〇四五―五四〇―三九四六)。

一人でも多くの謡曲ファンの人口を拡げてゆくことが我々の最大の使命であると信じ、少しでも関心や興味をもって頂くため、この二著を敢えて紹介した。

横濱能楽堂・山崎有一郎館長の「豊饒たる卒寿を祝う会」を終えて

横濱能楽堂 館長代理 中田 昭彦

横濱能楽堂の山崎有一郎館長の「卒寿を祝う会」が、九月八日に渋谷のホテルで開かれました。山崎館長はこの五月に九十歳の誕生日を迎えましたが、まさに「豊饒」そのものの。長年の能楽普及の功績と穏やかなお人柄から、当日は能楽界の重鎮をはじめ、横須賀や練馬で開いて

いる能楽講座の受講生や横浜能楽連盟の皆さん、横浜こども狂言会のことなどもたちなど約五百名もの方々が参加下さいました。



写真左から鳥越文蔵・山崎夫人・茂山千作・藤田大五郎・山崎館長・宝生閑(敬称略)

代表発起人の観世清和師ご挨拶のあと、スライド「山崎有一郎九十年グラフィティ」で若かりし頃の貴重な写真が葛西聖司NHKエグゼクティブアナウンサーの軽妙な司会で紹介されると、会場は大いに沸きました。そして栗谷菊生師による小謡「四海波」、宝生閑師・藤田大五郎師らによる鏡開きが行われました。関根祥六師のお孫さんによるフラダンス、横浜能楽堂職員によるタイ舞踊などの余興に盛り上がり、姪御さんでジャズシンガー・安ますみさんの歌で和やかに賑やかに締めくくりました。山崎館長のお元気に肖りたいと、閉会後もなかなか人の輪がほだけない盛会ぶりでした。

平成十五年度 定期総会報告

常務理事
総務担当 鈴木 力雄

今年度の定期総会は四月一日現在の会員数五四五名(前年比十四名減)のうち三〇六名の出席(委任状によるものを含む)により、平成十五年四月二十五日午後二時から横浜能楽堂二階レストランで開催された。

高岡副会長開会の辞、新堀会長挨拶、来賓祝辞(横浜市民文化部長石原敏明氏・能楽堂館長代理中田昭彦氏)のあと、連盟規約に基づき会長が議長となつて議事録署名人名二名(条亮一、井實昭子の両氏)の指名があり、続いて各議案が審議された。

第一号議案の十四年度活動報告、決算報告、監査報告。第二号議案の十五年度の活動計画(案)、予算(案)、共に原案のとおりの内容で承認された。

活動報告では、第五十回横浜能が五十回記念にふさわしい最高の内容をもって無事終えることができた旨の報告があった。

活動計画では、新しい横浜能として第五十一回からは横浜能楽連盟と横浜能楽堂との共催として、地元ゆかりの能楽師による演能として開催します。

なお、今回は役員改選期ではありませんが、秋山尚、杉山淑

朗の両氏が退任され代わつて高橋利雄理事(宝生流)と三谷光子氏(観世流梅若会)が常務理事に、吉田澄夫氏(宝生流)が理事に、連盟規約に定める手続きによりそれぞれ選任されました。

第十九回

横浜五流能楽大会を終えて

当番幹事
宝生流 吉田 澄夫

冷夏続きだった八月の元を取り戻すかのごとき酷暑のさなかの九月十三日(土)横浜五流能楽大会が横浜能楽堂で開催されました。十九回目ともなると大会

も一段と充実し、番組も素謡十三番、連吟六番、仕舞十三番、舞囃子二番、独吟一番、それに

生憎の出演者の急病で中止となつた独鼓一番を加えると全部で三十六番、延べ総出演者数は三百名以上の盛況振り、しかも出

演者による熱演もあつて九時半の開演から五時半の付祝言まで終日見所も賑わつておりました。

特筆すべきは極めてスムーズに大会を進行することができ、終演が五時二十五分、中止された独鼓の予定時間七分を考えると何と予定時刻に二分遅れただけでした。数多くの謡曲大会の企画・運営に携わった筆者のこ

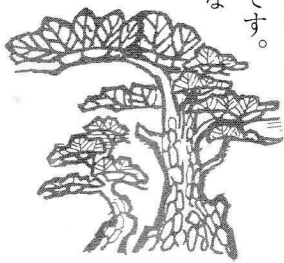
れまでの経験でもこれほど予定時刻どおり進行した大々きは稀有

なもので、これもひとえに申告時間を遵守いただいた各流責任者各位のご協力の賜物と、大会担当として厚く御礼申し上げます。

唯一つ苦言を呈しますと、見所でご自身とは別の流派の素謡の時に大声で私語を交わしている方を結構見かけました。折角熱演している出演者に礼を失するうえに周りの人にも迷惑をかけます。日頃、謡の稽古の際に舞台裏や見所でのマナーについてもご教導いただきたいと思ひます。

大会運営上で気になった点は昼食時の弁当です。弁当は作り過ぎによる無駄を省くために事前に予約しますが、当日予約無しの方が買つてしまい、予約した方に渡らないトラブルがよく発生します。私も宝生流の大会では予約券を発行してこの問題に対処しており、今回も部分的にそのシステムを取り入れましたが、初めての試みで不慣れなところがあり、一部の方に迷惑をかけてしまったようです。

どのような方法がいのか一考すべき問題かと思ひます。



能楽大会スナップ

堀内さや乃さん



堀内まゆ乃さん



『能・狂言なんでも質問箱』 を読んで

観世流梅若会 三谷 光子

横浜能楽堂館長・山崎有一郎氏は、今年五月九十才、卒寿を迎えられました。二年前の米寿を記念なさつて出版されましたのが表題の本でございます。

能を学び、研究なされた学識が遺憾なく発揮された、ステキな本に出来上がっております。

私も、能や狂言に関して読んだり、教えて頂いたりしてきたつもりでしたが、いまこの本に触れて、知らなかった事が何と沢山あったことと、目から鱗とはこのことかと思ひました。

内容は対談形式で、質問に答える設定になっておりますので、知りたいことが分かり易く、的確な答を得ることが出来ます。何処の頁をみても、楽しく知識を得ることが出来ますのは、さすが山崎館長さんのお持ちになる深い学識の賜物でございます。本の中から少し触れてみます。

例えば、能と言いますと、有名なものに『摺り足』といわれる歩き方についてですが、あの足の運び方に、舞と踊りの明らかな違いを知ることができました。「踊りは上下運動によつて成り立つから、足が上つてもいいが、舞は水平運動で成り立っている

ので、速く歩いて、必ず摺り足なのである」と明確です。初めて見る若い人などに説明する時、とても分かり易く、きっちりした教えですね。



又、能の謡はむずかしいがという問いに対しては、

「たしかに昔言葉が沢山使われていますから、聞いてみてすぐ分かるのは大変であるが、快いものは聞く相手に響いてくるから、むずかしい言葉を聞くよりも、音楽として、歌として聴くこともいいですよ」

と言っておられます。素人としてお稽古している私たちも心に留めるべき言葉ではありませんでしょうか。

ひとつ、とてもギクツとした事に、山崎館長さんは、

「観能の席には、中正面を選ぶ」と言われます。私などは目付柱が邪魔と思って、あの席は敬遠して来ていましたから、どうして...と思いましたが

「この柱を透かして能を観ることで」とおっしゃいます...すごいですね。私などいつにな

ったらそんな目が育つことかと忸怩たるものがあります。

そして終わりの言葉に

「細かいことはいいから、能の本質を見て欲しい。流儀によって型はいろいろだが、そんな細かいことより、各自が少しでも感性を高めて観てほしいと思う。感性で観て、気持ちいいとか、面白くないとか、自分に感じることを何よりも大切なのだということを知ってほしい」と申されています。

頭で考えるのではなく、ひとつでも多くの能・狂言に親しむことで感性は更に養われてゆくのではないのでしょうか。

この御本に刺激されて、ますます能楽が好きになりました。

演者のメッセージ

喜多流 富樫 哲夫

小学生の頃、日曜日の朝にはさまって父の部屋から朗々たる声が聞こえてくる。これが謡曲だとはいくど知った。部屋を覗くと畳にじかに正座し見台無し、勿論無本で謡っていた。

今、私の手元に遺品として残った宝生流謡本十三冊がある。

表紙こそ黄ばんではいるが各頁ともメモ書きもなく文字は昔の漢字で非常に読みにくい。

前に当能楽堂の山崎館長が講

演で「我々の頃はすべて無本です」と話していたことを思い出し、不勉強も手伝い今だに謡会でなく読み会の自分が情けない。ちなみに手元の謡本のうち

「八島」を紹介すると。

○表紙：八島 内十一巻の二

○解説：所 讃岐の国八島

(季) 三月

○大正十二年十月一日印刷

(改訂拾貳版)

○大正十二年十月五日発行

○著作者 故宝生九郎

○相続者 宝生重英

定価はなし

さて、社会人となつてからはご存知の高度成長期を迎え、会

社人間で突っ走っているうちに気がつくとは定年が近付き、老後の備えに何か上品な趣味をと思い小学生のときに耳にした謡曲を習い始めたがさっぱり上達せず、かといってやめたいとも思わないのだから実に謡曲とは摩訶不思議な芸ごとである。

私が最初に拝見した能舞台の印象は実に壮厳なたたずまいで絶対的な安定感を感じさせられたが歌舞伎のように豪華絢爛たる舞台にくらべなんとも殺風景なものにうつり、すべての贅肉をそぎ落としたダイエツトなものだ。これが幽玄の世界というもののかと自分勝手に解釈をしている。

横浜金剛会の今年の夏

金剛流 望月 悦夫

今年の夏の天候には何方も体調を整えるのにご苦労なされたことと思います。冷たい梅雨は八月に入っても納まらず、その後一転して、猛暑は彼岸入りの前日まで連日連続しました。

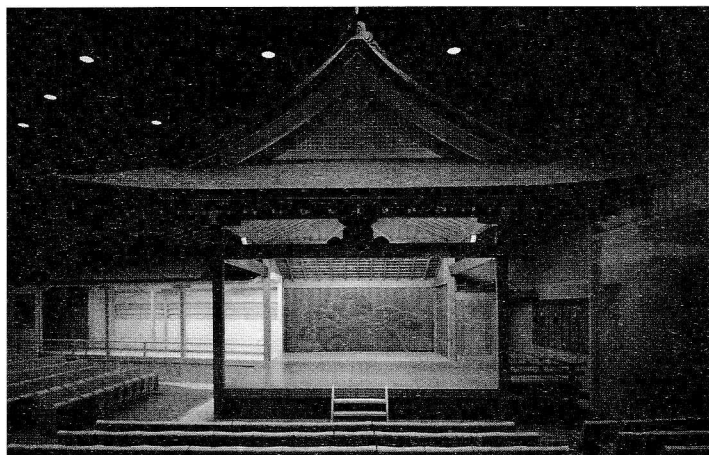
こんな時期に、私共の横浜金剛会は幾つかの大きな行事が重なって特別な夏になりました。

十周年記念大会

残暑盛りの八月二十四日、横浜能楽堂本舞台にて横浜金剛会発足十周年記念「謡曲と仕舞の集い大会」が開催されました。

横浜金剛会は、昭和六十二年に横浜能楽連盟に加盟し、他流の皆さんから、これで全流派が揃ったと歓迎されました。その時の会員は故田村信一郎先生の横浜での門下生だけで少人数でした。横浜地域には東京へ行つて稽古している人もあり、また久良岐能舞台の金剛流「謡曲・仕舞教室」に新しい人の参加もあったので広く一般に参加を呼掛けました。中には社中を越えての交流に戸惑いもあったようですが、やっと平成六年になつて、各グループの連合体としての横浜金剛会は会則を定めて発足しました。

今回の記念大会は九十人余の



故田村信一郎七回忌追善会
奥野達也師亡きあと東京
金剛会を支え、まち横浜で

出演者により舞囃子四番、連吟と独吟十三番、仕舞二十三番を朝の十時始曲、夕方の五時迄、一般来場者と流友の前で存分に披露しました。私も舞囃子「安宅」を舞わせて頂き良い思い出の一つ重ねました。

金剛能楽堂落成（京都）

新しい金剛能楽堂は玄関が御所の森の築地塀に面した歴史的にも伝統文化に相応しい地に新築完成しました。

六月十八日に舞台抜きがあり、記念式典には常陸宮殿下のお言葉と、各界名士の祝辞があり、宗家が謝辞を述べられました。その家元の語り口には、こま

での二、三年來のご苦労と立派に仕上がった舞台へのお喜びの心情が良く表れていました。記念能は宗家の「翁」に各流家元の舞囃子、仕舞と茂山千作さんの狂言がありました。私は横浜金剛会の代表として招待状を頂き千戴一遇の機会に参加させて頂き、感慨を胸に、霧雨にかすむ御所の森をあとに一条通りを一駅歩いてから横浜への帰路につきました。

金剛流全国流友大会（京都）

開館間もない金剛能楽堂で七月五日・六日に開催され、東京・横浜からも豊嶋先生と共に団体で参加しました。舞台は室町の旧舞台（明治初年築）が移され、白木を基調にした新しい堂内は一瞬、横浜能楽堂を思わせました。由緒あるこの舞台が生まれ変わり、初めて踏ませていただいた床の響きに感動しました。五個の甕も移設されたとのことです。大会の間口にロビーやギャラリから眺める庭の大樹と、石舞台をしつらえた池は、この日も降り続いた雨が賑わいの中にも静けさを演出しました。

の金剛流育成に尽力された恩師の七回忌に当り、田村会が追善会を七月二十一日、国立能楽堂で催しました。信一郎師を偲ぶ流友が多数出演し、夜の第二部はご子息、修師の能「船弁慶」と狂言、一調、仕舞等が手向けられました。

朝十時からの舞台は三十分程遅れましたが、滞りなく終了して実行委員として安堵しました。この日も一日梅雨空で土用なのに冷たい夜でありました。



横浜金剛会十周年記念大会

能楽堂だより

十二月～三月の公演

横浜能楽堂では次の通り公演を開催致します。

「第四十二回普及公演」

「バリアフリー能」

十二月十三日（土）午後二時。

能「鍾馗」（金春流）吉場廣明、

狂言「柿山伏」（大蔵流）山本則孝。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。介護者一名無料。チケットは十一月九日（日）窓口・電話・FAX・Eメールとも午後二時から。

「第二十八回定期公演」

一月十七日（土）午後二時。

能「葛城」（観世流）平井俊行、狂言「鶯」（和泉流）三宅右近。正面四千円、脇正面三千三百円、中正面・二階二千八百円。チケットは十二月二十日（土）窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

「第四十三回普及公演」

二月二十一日（土）午後二時。

能「通小町」（喜多流）栗谷能夫、狂言「郭公」（大蔵流）茂山千三郎。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。チケットは一月十八日（日）窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

「奨励公演 新進立合狂言」

二月二十九日（日）午後二時。

狂言「餅酒」（大蔵流）山本則秀。ほか狂言三曲。チケットは一月二十四日（土）窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

「企画公演 日本の音」

各日午後二時。

《編集後記》

▽今秋、横浜能楽堂・山崎有一郎館長の「矍鑠たる卒寿を祝う会」が盛大に催されました。この会を企画の段階からお世話された中田様に、我が国能楽界の先生方を始め多くの関係者が参集され、盛会裡に終えた様子を書いていただきました。

▽前号、「幽玄特集号」四ページの各流競演素謡会の連吟『小鍛冶』地頭、鶴沼昭吾とあるのは鶴沼昭吾の誤りでした。お詫び申し上げます。（MS記）

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜市中南区丸山台二丁目
二九一七 新堀方
FAX ○四五-八四四-二九〇三
◎電話の場合
横浜能楽堂 原田由布子
TEL ○四五-二六三-三〇五〇

十二月七日（日）「三曲の至芸」
箏・三味線・尺八・胡弓、一月十八日（日）「江戸の風情 上方の粋」端唄・小唄・新内・地歌・長唄。二月一日（日）「町衆の心意気」日本三大囃子。三月二十七日（土）「王朝の雅」琉球古典音楽。全席指定・一回券四千五百円。チケット発売中。
お問い合わせ・お申し込みは、○四五（二六三）三〇五五まで。